
Zauber die Gelehrtenwelt **氷結の来訪者と焔の姫君**

北条 恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Zauber die Gelehrtenwelt 氷結の来訪者と焔の姫君

【Nコード】

N9246N

【作者名】

北条 恋

【あらすじ】

剣と魔法が栄える世界、イルズイオン。

エリート魔法使いが集う魔術組織リカードにて、十五歳の天才少年に与えられた任務は、少年の未来を大きく変えることになる。

天才と呼ばれた氷結の魔法使い、ヴァイゼン・イシュバリオ。

これは彼とその仲間達が書き記す魔法戦記である。

prolog：天才少年と初任務

剣と魔法が栄える世界、イルズイオン。その首都デュナスティアに存在する魔術組織リカード。

迷子の猫探しから犯罪者集団の確保といった危険な任務まで、住民からの依頼を幅広く請け負う魔法界の便利屋。

しかし、その実績は高く、国から与えられた権力はお国付きの魔法警察をも凌ぐ。

そのため、便利屋とは言えど、今では魔法警察では手に負えないような危険度の高い依頼ばかりを任される団体となってしまうている。

と、そんな危険な団体、リカードに数ヶ月前に入団した十五歳の少年がいる。

名をヴァイゼン・イシュバリオ。

リカードには年齢制限こそないが、常に死と隣り合わせである現場。成人を迎えていない団員などヴァイゼン以外にはいない。ダントツの最年少。

数ヶ月前、入団時のテストを通った以上その実力は本物。かといってまだ子供だという不安が消えるわけではなく、入団から今まではベテランの団員に付けて仕事をさせられていたのだが、今回、初めてリカードのリーダーからヴァイゼンへ、単独で呼びがかかった。

単独任務の嬉しさからか、一人団長室への道を歩くヴァイゼンの足取りは軽い。

そして、意気揚々と団長室の扉を開け放つヴァイゼン。

「ヴァイゼン・イシュバリオ。入ります」

その先には、幾つもの戦場をくぐり抜けてきたな戦士、リカードのリーダーであるフライエ・ジークフリードの姿。

「来ましたか。とりあえず座ってください」

見た目はお世辞にも強そうには見えない優男なフライエ。

端から見れば若干十五歳のヴァイゼンの方が逞しくも見えるが、フライエを前にして萎縮するヴァイゼンを見れば、双方の力量がどちらに傾いているのかは明らか。

「あまり固くならないでください。イシュバリオくん」

「あ、はい……」

ヴァイゼンが対面に腰を掛けると、フライエは一つ微笑んでから話を始める。

「今回キミに依頼する任務は……潜入任務です」

「……………潜入任務？」

潜入任務と言われれば、真っ先に思い浮かぶのは暗殺やスパイと

いった隠密行動。

潜入先にバレれば死は確実。危険度は計り知れない。

「お言葉ですが、自分には荷が重いかと……」

いくら初の単独任務と言えど、任務を完遂しようという責任感
はヴァイゼンにもある。

隠密行動が得意なわけでもないヴァイゼンは難色を示すが……

「いえ、これはキミが適任……というか、キミにしか頼めない任務
なんですよ」

「それはどういう意味ですか？」

ヴァイゼンが尋ねると、フライエはヴァイゼンの前に一枚の紙切
れを差し出す。

そこに書かれていたのは

「……エーアリヒ魔法学校入学申請書？」

その一枚の紙切れと、自分に向けて微笑みかけるフライエを交互
に見て、ヴァイゼンは額に冷や汗を浮かべる。

「イシュバリオくん、キミにはそこに生徒として入学して諜報活動
を行ってもらいます。尚、これは団長命令につき拒否権はありませ
ん」

天才少年ヴァイゼン・イシュバリオの初任務は、仲良しこよしの

学園生活に決まってしまった。

A c t 1：天才少年と魔法学校

ヴァイゼン・イシユバリオにエーアリヒ魔法学校への潜入任務が言い渡されてから数日が過ぎ、当の魔法学校では今年度の新入生を迎える入学式が行われようとしていた。

エーアリヒ魔法学校は首都デユナスティアから遠く離れた田舎町、エーアリヒの中心にある。

田舎とは言ってもエーアリヒは魔法文化の盛んな町で、当のエーアリヒ魔法学校も名門と呼ばれる学校の一つ。新入生の数も五百を超える。

そんな多くの新入生達は今広大な学校の一角に集められており、その中には当然ヴァイゼンの姿もあった。

「魔法学校か……名門だつて聞いていたけど、周りの連中からはそれほど大きな魔力は感じないな」

ヴァイゼンは退屈そうにしながら、出発前にフライエから渡された指令書を眺める。

フライエの話によれば、今年度の新入生の中に凶悪な魔法使いが紛れ込んでいるとかいないとか。

ヴァイゼンは一応周囲を警戒するも、そういった邪悪な魔力は感じない。

最も、そんなものを発していれば、自分でなくとも学校の教師陣が気づくだろうが、高位の魔法使いともなれば、体外に放出される魔力を一定量に抑え、周りに気付けさせないようにすることなど容易。当然、ヴァイゼンも目立たないようにそれを行っている。

ヴァイゼンが周囲への警戒を続ける中入学式のプログラムは順調に進んでいく。

最後に学校長からの割とありふれたお言葉を頂き、今年度の入学式は何事もなく終了した。

集まった新入生達はそれぞれ入学式前に発表された自分達のクラスに向かい、ヴァイゼンもそれに習おうとしたところで、後ろから声をかけられた。

「ヴァイ！ 久しぶりじゃないか」

「……………レスター？」

呼びかけた青年はヴァイゼンの元に歩みより、整った顔立ちを少し崩して微笑みかける。

きちつとしたスーツがよく似合っており、女生徒からの人気が高そうな爽やか系のイケメンといった印象。

「レスター、まさかあんたも？」

「キミの想像通りさ。最も、僕は去年からだけどね」

このレスターもヴァイゼンと同じく、リカードに所属している魔

法使い。

魔法学校ではなにかとトラブルが多い。その為リカードから腕の経つ魔法使いが派遣されるのはよくあること。リカード所属の魔法使いは例外なく高い実力を持っているので、教師として職についても違和感はないのだ。

「けど、まさかキミが、それも生徒としてここに派遣されてくるなんてね、どういうことだい？」

「知るか。俺だって好きで来たんじゃないよ」

「まあまあ、せっかくだから学校生活を楽しんでみたらどうだい？学校、通ったことないんだろう？」

「くだらない。さっさと任務を完了してリカードに戻るさ」

「そつえば、キミの任務ってなんなんだい？」

言葉で説明するよりも見せた方が早いと、ヴァイゼンは懷から指令書を取り出してレスターに手渡す。

「……なんだか、イマイチはつきりしない任務だね。要はなにか悪い事が起こるかもしれないから警戒しておけってこと？」

「だから俺が知るかよ。ま、何事もなければリカードから帰還命令が出るだろ」

「んー、そうだね。去年もここは随分と平和だったし」

その後少しの間レスターと世間話をした後、予鈴を合図に別れ、ヴァイゼンは自分が割り当てられたクラスに急いだ。

本意ではないとはいえ、学業を疎かにしては不真面目な生徒として目立ってしまう。

単独での任務が初めてだとは言えど、任務中の行動の基本はしっかりと心得ている。

自らが所属することになるクラス、1 Gと書かれた教室の扉を開けると、中には既に三十人ほどの生徒の姿があった。

男女比率は3：7ほどで女子の方が高く、やはりそれほど強い魔力は感じない。

「えっと、俺の席は……」

教卓後ろのブラックボードに書かれている座席表と自分の生徒IDを照らし合わせ、中央後ろから二番目の席に腰掛けると、すかさず隣の席に座る男に声をかけられた。

「よっ、俺はクライス。クライス・ブライエン。お前の名前は？」

「……ヴァイゼン・イシュバリオ」

「ヴァイゼン……ヴァイって呼んでいいか？ 俺のことも好きに呼んでいいから」

「好きにしる。それよりなんか用か？」

「いや、特に用はないんだけどよ、せっかく隣の席になったんだから仲良くしようぜ。それに……お前、タダモンじゃねえだろ。上手く隠してはいるけど、ちつとばかし魔力が漏れちまつてるぜ」

「……………へえ」

ヴァイゼンは素直に感心した。

目の前の少年は一目で自分の実力が飛び抜けていることに気づいたのだ。

魔力は目に見えるようなものではないので、それは純粹にクライスの知覚が優れていることになる。

「はいはい、皆さん席についてください。ホームルーム始めますよ」

それからしばらくして、1 G教室に担任教師が現れそう告げる。

現れたのは先ほどの爽やか系イケメン、レスター・バークライド。

「レスターが担任って……マジかよ」

ヴァイゼンは頬杖をつきながら呟き、肩を落とす。

「えー、まずはそうですね、皆さんに自己紹介でもしてもらいましょうか。あまり時間もないので名前と、簡単な自己アピールだけでいいよ」

レスターの指示で先頭に座る女子が立ち上がる。

「えっと……フェリア・ステイドです。皆さんよろしく願います」

小さめ身長に似つかわしくない長い真紅の髪が特徴的な少女。腰にはこれまた身の丈ほどもある長い刀を差している。

「……です。特技は……」

順番に立ち上がって自己紹介をしていく生徒達。

そして隣のクライスが終わり、ヴァイゼンの番

「ヴァイゼン・イシュバリオ。得意魔法は氷結系。よろしく」

なんの面白みもない自己紹介。レスターもこれにはやや呆れ気味だ。

「……です。よろしく」

「はい。全員終わりましたね。では次に、今から配るプリントに目を通してください」

レスターがそう言って手を掲げた瞬間、生徒達の前に一枚のプリント用紙が現れる。

「ここでは基本的に六人一組のチームで行動してもらいます。今配ったプリントに僕が独断で決めたチーム分けが書かれていますので、席を立ててチームごとに集まってください」

そう言われ、ヴァイゼンはプリントの中から自分の名前を探す。

自分の名前が書かれた欄には、隣の席に座るクライスの名前もあった。

「お、ヴァイも同じチームじゃなか。んじゃここに集まってもらうか。おい！ チームBの奴はこっちに集まってくれー」

声を張り上げて手を振るクライス。

目立つのを避けたいヴァイゼンにとっては、率先して動いてくれるクライスが同じチームにいるのは幸いだったかもしれない。

集まったメンバーはヴァイゼンとクライス以外は皆女性。

女子率が高いクラスなのでどのチームも似たような割合だ。

「ちゃんとチーム別で別れましたかー？ 次の時間から授業はチームごとに取ってもらいますので、残りの時間でよく話し合って決めてくださいね」

そう言い残して教室を出ていくレスター。

このエーアリヒ魔法学校では始業時と修業時に行われるホームルーム以外の時間は基本的に自由。

チームごとに予定を決め、各所の専門教室に赴いて修行に励み、定期的に行われる能力テストで結果を出して単位を取るシステムになっている。

「授業開始まではまだ時間があるし、改めて自己紹介とこうぜ」

チームBのメンバーを集めてクライスが提案すると、無関心のヴァイゼン以外は快く頷いてくれた。

「じゃあ私から。フェリア・ステイドです。魔法はあまり得意ではないので、前衛に置いてもらえると助かります」

実戦テストも当然チームごとに行われるので、メンバーの得手不得手を考えて配置するのが一般的。

前衛はその名の通り、剣などの武器を用いて戦う者のポジションだ。

「ユーティリア・レフティスです。よろしく願いします」

フェリアも小柄だが、ユーティリアと名乗った少女はそれよりも更に小さい。

入学試験さえ通れば年齢不問の学校なので、もしかしたらヴァイゼンよりもずっと年下なのかもしれない。

「アリカ・イングヴァルトや。よろしゅう」

ショートカットの活発そうな印象を受ける少女アリカ。

見たところ装備は見当たらないが、性格的には前衛向きに見える。

「エーリカ・ツヴァイです！　よろしくネ」

桃色の頭髮と弾ける笑顔が印象的な少女エーリカ。

アイドル気質というやつだろうか。前衛には見えない。というか魔法使いには見えない。

「俺はクライス。それでこっちが」

「ヴァイゼン・イングヴァルトだ」

ヴァイゼンが名を名乗ると、測ったかのようにホームルーム終了を告げるチャイムが鳴り響く。

「みんな、これから一年よろしくな」

女性陣と握手を交わしていくクライス。

最後に目の前に差し出されたその手を、ヴァイゼンは戸惑いながらもしっかりと握ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9246n/>

Zauber die Gelehrtenwelt 氷結の来訪者と焔の姫君

2010年10月9日05時56分発行